

## 第6分科会

# 女性たちの仕事おこしと協同



木下 武男

(法政大学)

はじめに

前回の名古屋における協同集会で「女性たちの仕事おこしと協同」の分科会が初めて設定され、今回は2回目であった。「男性たちの仕事おこし」の分科会がないのに、なぜ女性たちの分科会があるのか。この男性と女性の「関係性」、すなわちジェンダーの視点から協同を問い直すことが分科会の課題であったといえる。それは、このジェンダー視点によって協同の運動と女性の運動とを架橋することができるならば、両者の運動に大きな可能性をあたえることになるからである。分科会における各報告はそのことを強く感じさせた。分科会の内容は要約すると次のようであった。

### 分科会の報告

【問題提起】内山哲朗 (工学院大学)

分科会の目的として、まず、1つは、前回の協同集会で各地の女性たちのグループがたくさんあ

ることがわかったので、それに引きつづき、今回も経験を交流していくこと。2つは「男が外、女が内」という性別役割分業の社会のなかで、女性が自立して働くことはさまざまな困難がともなう。個の自立を大切にしながら、自立と協同の視点を深めること。3つは、まだ点として存在している女性たちの仕事おこしを、線につなげ、さらに面に広げること。内山さんの問題提起を受けて、各パネラーの報告に入った。パネラーの報告を中心に、各紹介資料も参考にしながら、報告を以下紹介しよう。

【報告①】近野明子「ファーマーズマーケット道草」

米沢市、高畠町、川西町にある農事組合法人・米沢郷牧場は米、野菜などを生協におさめている。その農家の主婦を中心に12人で1995年6月、有機栽培の農産物売る店を開いた。畑や果樹園や田んぼがそのまま店になり、道行く人が気楽に声をかけ、お茶でも飲みながら、ちょっと道草し

- |      |       |                       |
|------|-------|-----------------------|
| 司 会  | 木下 武男 | (法政大学)                |
| 問題提起 | 内山 哲朗 | (工学院大学)               |
| コメント | 今井 千恵 | (日本学術振興会・静岡)          |
| 報 告  | 近野 明子 | (ファーマーズマーケット道草・山形)    |
|      | 高家 章子 | (高家領水車母さんの会/森のそば屋・岩手) |
|      | 井上 純子 | (パン工房Zozo・宮城)         |
|      | 岡元かつ子 | (とうふ工房・埼玉)            |
|      | 中村 祥子 | (グループゆう・宮城)           |
|      | 大沢 靖子 | (東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合)  |

たくなる、そんな店にしたいと「道草」という名前をつけた。

店を開いた直接のきっかけは、農家は消費者が何を求めているのかを知らなければならないということだったが、討論を重ねていくなかで、より安全で、美味しく、栄養価があり、品質が良く、日持ちがするものを作り、自信を持って生産基準をシールで表示し、店に並べたいという意欲も高まった。自分たちで決めた生産基準は、完全無農薬栽培にはゴールドマーク、低農薬の場合はシルバーマークを張っている。また朝、収穫した野菜を店にもってきて並べるので、市場にだすときは例えばトマトは傷まないように青いままだが、店には食べ頃の真っ赤なトマトを売ることができる。

「道草」は、「大切にしたい6つのこと」として次の6点をいつも確認し、活動しているとのことであった。①生産者自らの生産基準を生産物に表示して販売する。②生産者自ら売もの、価格を決めて販売する。③生産者のお母さんたちが運

営する。④生産の現場で販売する。⑤食のこと、暮らしのこと、環境のことを生産者と消費者という関係だけでなく、同じ生活者として交流・行動する拠点とする。⑥全国の志を同じくする生産者の自慢作を食べあう。

現在の農家は、「『男は外、女は内』の典型的な考えが支配的で、実際は女の人も外で農作業をやっていて共働きなのだけど、家のなかでは女は家事一切をやって、男はこたつに入って新聞を読んでいる」状況である。しかし、このような農家の主婦独自の協同の営みが、「地域に愛される農家づくり、農村の女性の自立、農村での協同づくりをお店を拠点としてやっていきたい」という女性たちによって少しずつ変わっていくようだった。実際、「道草」にかかわっている農家では後継者も生まれているということだった。近野さんも、これからの農業は、女性を労働力として認めさせて、「女が農家を継ぐ」というくらい女性の役割にかかっていると発言した。

【報告②】高家章子「森のそば屋」

盛岡市からバスで2時間、平庭高原のふもとにある江刈川地区は戸数56戸の小集落である。そこにある高家領集落には10戸の共同水車があり、大正時代から回り続けている。この水車を利用して自家栽培のそば麦を水車の石臼でひき、その粉を、手打ちそばの技術で打って、美味しいそばをつくる。この「森のそば屋」は1992年11月にオープンし、今では17名の女性たちが働いている。石臼でひくと熱が出ないので風味が損なわれない。そのそば粉を、女性たちが代々受け継いできたそば打ちの技術でつくったそばの味は評判を呼び、店は盛況が続いている。

この地域は「封建的な考えが支配的な農村で、女の人は男の人の許可なしにはなにもしることができません」という家父長的な地域だった。そのなかで高家さん夫妻が「封建的で男性社会の部落を変えていきたい」、「そのためには女性の地位を上げる必要がある。女性たち農家以外の収入を持つ方法はないだろうか」と考え、そして「高家領水車かあさんの会」をつくり、「村八分的なあつかいを受け」ながら「森のそば屋」の開店にこぎ着けた。その悪戦苦闘の話、楽しく報告する高家さんの話は、分科会参加者に大きな感動を与えた。

「森のそば屋」の担い手は、役場の職員の高家さんを除くと、みな農作業と牛飼いの仕事しかしてこなかった農家の主婦である。「最初は週1回しか認めてもらえなかった」が、今は週3回になり、「収入は多い人で130万円、少ない人で30万円」という。

【報告③】井上純子「パン工房Zozo」

「Zozo」は、仙台にある天然酵母のパン屋である。始めて10年になる。井上さんは、無認可の共同保育所づくりをして、そこで10年間保母を勤め、そろそろ若い人達に保育所をゆずりたい思い、パン屋を始めた。理想的なパン屋になりたいということよりも、「自分らしく働ける仕事場をつくりたいという気持ちから」出発したという。

「女だてらにパン屋をやるとは」とか、「趣味で焼いていけばいい」とかいわれたが、機械一式が手に入る幸運もあり、250万円で立ち上げた。3年たって軌道にのり、現在は7坪の店で5人が働いている。

「Zozo」の店は、共同保育所の運動の蓄積が生かされて、地域にとけ込み、支えられていることが印象的だった。井上さんは、「何よりも女が仕事をするとき、私たちにとっては小さな子どもたちを抱えての出発、同じ地域にすむ保育所の人達の協力が大きな支えであった」、「10年間の保育所づくりを通して」「信頼関係を築く事が出来、地域にもしっかりと根をおろしたように思う」と述べた。

そして井上さんが「20年以上の地域での仕事づくり」と表現しているように子どもを育てる共同保育所もパン屋も、地域の女性にとっては同じ仕事づくりだったのである。このようなパン屋の営みは、生産者との結びつきを通じて「パン屋やって畑が見えるようになり、ひいては山、森、海と循環している自然の構造を考えることで、自分の生活を見直す」という視野の広がりをもってきたのだろう。

【報告④】岡本かつ子「とうふ工房」

「とうふ工房」は、センター事業団埼玉北部事業所の女性組合員が95年にオープンした豆腐屋である。深谷の駅から1キロほど離れたところにある。事業団の組合員が9年間行ってきた生協の物流センターの仕分け作業が、生協の合併などで仕事減となり、自分たちで仕事おこしを考えなければならなくなった。そこで長野県北御牧村で村おこし事業として主婦がやっている豆腐事業を見学にいき、これならできそうだと思い、始まった。

スーパーで売っている豆腐よりもかなり高い。しかし、100%国産大豆を使用し、にがりで固めた豆腐は、安全で、昔懐かしい本物の豆腐の味にすることができた。現在、6坪の店で、1日に360丁を生産している。大豆の栽培も、事業団のルートで結びついた産直グループに呼びかけて、低



農業での栽培が実現した。生協の豆腐も外国産の大豆だが、ここではすべて国産大豆である。

「とうふ工房」は、生協の物流の作業をやっていた主婦を中心に、40歳代、50歳代の6人で運営されている。岡本さんは、仕分けの仕事をしていた時、最初は大変な仕事をさせられているという気持ちもあったが、いい仕事をしていくという考えが変わった。しかし、生協の仕事は、結局は下請にしかみられない、自前の仕事をおこしたい、その願いが食関連の事業を何とか展開しようという努力につながったという。

「とうふ工房」は、農家のおばあさんの教えを受けて、自家栽培の大豆で、無農薬、無添加の昔ながらの味噌づくりも始めた。また、総菜店や老人給食も計画されている。主婦のもっている「食」へのこだわりを基礎にした事業団の新しい展開がみられる。

【報告⑤】中村祥子「グループゆう」

「グループゆう」は、高齢者の給食サービスをおこなっているボランティア団体である。95年から導入された仙台市の「高齢者等への給食事業に対する補助金」制度の対象団体になった5つの市民グループが、「食事サービスネットワークみやぎ」を結成した。「ゆう」もその一つである。30人ぐらいのボランティアが、「自分たちの作った食材、地場の物、国産の物を大切にしたい」給食を

調理し、週1回、90人ほどに宅配している。

「ゆう」は、みやぎ生協の食生活グループが学習するなかで、「高齢社会」、「家事労働」、「食」が結びついて生まれた。メンバーのほとんどは家庭の主婦だが、自分が働いていないことに劣等感を持っていたという。しかし、たとえば、介護のボランティアをやっているのに「あの人のおばちゃんの面倒をみているのになぜあの方は勤めているの」という気持ちもあった。それは家事労働が認められていないことからくることに気づいた。社会にとって不可欠な、しかし「陽のあたらない女性の家事労働を正当に労働だと認めてもらいたい、その入口として、家事労働の延長でできる高齢者の給食サービスを始めたという。分科会報告における中村さんの強調点でもあった。

また、自分たちが高齢者になっても、人間として対等につきあえるような「世の中づくり」を今のうちにしておきたい、自分たちにとって住みやすい高齢社会を今からつくりたい、そのような考えから、「ゆう」は「老いを安心して、生きることのできる共生の社会づくり」をめざすことを目的に掲げている。週1、2回ならボランティアをしてもいいという女性が無理なく社会参加できる形態であるが、家事労働を地域に還元することを通じて「家事労働の社会化を声に出せないでいた女性を力強く後押ししてくれよう」との実感をつかんでいるようだった。なお「多くの人が仕事

の1つとして、市民活動を選択できるために、有償ボランティアのあり方」を考えていくことも目的にしている。

#### 【報告⑥】大沢靖子「東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合」

東京でワーカーズ・コレクティブが発足したのは84年、生活クラブ生協が提案したのがきっかけだった。生活クラブ生協に加入している30歳代、40歳代の女性の組合員が主体になり、11ワーカーズ、約150人でスターとし、現在では、30行政区に74団体、約1500人が働いている。事業内容は20業種、総事業高約13億円となっている。

89年には、各ワーカーズに共通する仕入れや、保険業務、広告宣伝などを担う、東京ワーカーズ・コレクティブ連合会をつくり、93年に事業協同組合の認可を得た。連合会は、先の事業の他にも資金の貸付や経理・事業展開をテーマにした研究会、開業講座なども行い、ワーカーズ間の情報交換や運動の中核となっている。

このワーカーズ・コレクティブの運動は「女性と協同」として重要な二つの視点を提起している（伊藤由理子「ワーカーズ・コレクティブの中間決算」『リスク・ビジネス』学陽社1、1994年）。生活クラブ生協の柱である「商品行為のなかに自治はあるか」の視点を、労働に生かすならば、「労働のなかに自治はあるのか」になる。女性の労働力がパートタイマーとして「産業社会を補完する代替可能で安価な労働力として定着」しつつあるなかで、その安易に駆り出されてしまう主婦のパート労働に対する「もう一つの働き方」がワーカーズ・コレクティブだった。女性が担っている規格化され部分化された労働から、協同労働へという視点である。

あと一つは、女性のパート就労と同じ過程であるが、「主婦が外に出ていくにしたがってシャドー・ワークの部分が発達され始め、その産業化された元のシャドーワークの仕事をパート主婦が担うという構造が現れ」、それに対して「産業化されたシャドーワークを自分たちの手に取り戻そ

う」という視点である。実際に、ワーカーズの事業は、弁当・総菜製造販売、レストラン、パン・クッキー製造販売、食品加工販売、背広採寸、高齢者への食事サービスや家事介護などに広がっている。

ワーカーズ・コレクティブは東京だけでなく、ワーカーズ・コレクティブ・ネットワーク・ジャパン(W.N.J)という全国的なネットワーク組織がある。すでに341団体、8321人、事業高57億円にのぼっている。大沢さんは、全国的にみてもワーカーズ・コレクティブの法制化問題と、女性を主婦につなぎ止める配偶者控除の問題が、今後の課題だろうと指摘した。

#### 【討論】

報告のあと討論に移り、まず、コメンテーターの今井千恵さん（日本学術振興会）から、夢や楽しい部分だけでなく大変なところも話してほしい、また税制と社会保障のいわゆる「100万円問題」と関連して経営問題も重要であるとの指摘があった。それを受けて、「農作業との両立」（道草）、「旦那との葛藤、女性同士の人間関係のむずかしさ、経営」（ZOZO）、「労働対価を考える運営をしなければと思っている」（ゆう）などの答えがあった。

協同集会第1日目の「リレートーク」のスピーカー・嶋原幸恵さんから「その土地でつくった物を提供することで、町と村の人が行き交って、そこで昔でいう市場が発生してきている。女たちのエネルギーで町が動き、村が動き、次に伝えるものができるのかなと思う」との発言があった。

#### アンペイド・ワーク（無償労働）から協同労働へ

分科会は「女性と協同」をこれから考える上で、共有できるいくつかの確認点が得られたように思われる。まず第一は、女性の協同論に不可欠なこととして、アンペイド・ワーク（無償労働）から協同労働へ、というテーマが浮かび上がってきた

ということである。1995年に北京で開かれた第4回世界女性会議は、女性のアンペイド・ワーク（無償労働）に光をあてたところの一つの特徴があった。家庭における家事労働や介護労働、地域のボランティア、農家や自営業における女性の家族労働など、これまで国民経済計算の外にあった無償労働を正当に評価することが強調された。

分科会で報告したグループは、農家における家族労働の延長から始まった野菜の販売や、豆腐・パン・そばの製造販売など「食」関連と福祉の分野における協同の営みだった。女性が担っている家事・育児や介護の労働は、人間の維持と再生産にとって不可欠な労働であるが、それはシャドー・ワークとされ、市場労働から隠された労働となっていた。この分野が今日、産業化され利潤追求の市場にされてきている。この「元シャドー・ワーク」を、地域を基盤に協同労働の手によって奪還することは、人間の再生産にとって重要な課題になってきているように思われる。

同時にそのことは、性別役割分業のもとにおかれている女性が経済的に自立していく道筋は、雇用されて働くペイド・ワークを経なくても、アンペイド・ワークから協同労働へというルートも存在していることを示している。

しかし、実際にはこの分野は、女性が協同の営みを始めるあたりは、さし当たり、「手っ取り早い」という面をもっている。確かに、女性が経済的に自立するだけの事業体の運営という点では多くの課題を残しているが、ともあれ、女性の協同論の基本的なテーマであることは確認できるだろう。

第二は、協同の営みを担う女性たちが、新しい女性の運動のなかから生まれてきているということである。専業主婦層を中心にした日本型生協が急速に増大してきたのは70年代、80年代であり、日本の女性運動が、性別役割分業を問う視点から新しい発展をみせだしたのも、1975年の第1回世界女性会議からである。

分科会報告のパネラーや発言者の多くはこの女性運動や消費者運動のなかから生活と労働の新しい

い価値を感じ取った女性たちだった。安全、環境、自立、地域、ネットワークなどの言葉が共有されている。ということは、女性による仕事おこしは、これらの運動に参加した多くの女性たちの広いすそ野をもって広がる可能性があることを示している。

第三は、女性の協同は、地域を基盤にしているために「地域づくり」と密接な関係をもっているということである。企業社会にのみこまれた多くの男性は今や地域にはいないが、家事・育児・介護を専担させられている女性は、家庭と地域から離れることはできない。離れられないけれども、女性にとって、経済的な自立は強い願いになっている。だから地域に居つづけながら労働の場を創り出すことが必要になる。女性にとって「地域づくり」とは、専業主婦でない限り、仕事おこしと必ず結びつかざるをえないのである。

また「食」や「農」や「福祉」といった分野の仕事おこしは、まさしく地域住民が対象となる。地域という社会空間に、「生活者」の視点から、労働の場を創り出すことを通じて、「地域づくり」に貢献することができるのである。女性の協同と地域というテーマは、今後も深めなければならない課題であった。

女性の雇用には、もとより家庭の主婦にとってのみならず、独特の困難が付きまとっている。女子学生が就職できない、結婚・子育てで仕事をやめなければならない、会社で差別される、パートでしか再就職できない。これらは、女性差別と性別役割分業からくる女性特有の困難である。しかし、この条件が今日、女性たちを起業、仕事おこし、協同という方向に向けているように思われる。今、各地でおきている、女性たちの何かをしたいといううねりを協同の側が受け止めることができるならば、協同の運動はいっそうエンパワーメントされるに違いない。分科会でつくられた全国的なネットワークの持続と広がりが求められる。